

IV-40

人々の交流を支援する都市空間のあり方に関する研究

秋田大学 学生会員 ○川辺 篤志

秋田大学 正会員 木村 一裕

秋田大学 フェロー 清水浩志郎

1. はじめに

今日の情報化、国際化の進展した社会においては、さまざまな機会やメディアを通じて活発な情報交換が行われる一方で、人々の直接的な交流が減少することが懸念されている。人間には元来人に認めてもらうことへの欲求があり、挨拶したり話したりするだけではなく、ただ目が合うだけであっても、自分の存在を意識するものであるといわれている。¹⁾

その意味で都市空間は、さまざまなレベルの交流の場を提供できる貴重な空間であり、今日の高齢化や核家族化の進んだ社会において、ますます重要な役割が期待される空間であるといえる。

以上のような観点から、本研究では交流に対する人々の意識や必要性について分析し、人々の交流を支援する都市空間のあり方を考察することを目的としている。

2. 研究の概要

本研究では、人々の交流を支援する空間の整備方策について考察するため、人々の交流実態や交流に対する認識等について調査を行った。調査概要を表-1に、また調査対象として考える交流空間とその使い方について表-2に示している。

表-1 調査概要		表-2 対象空間の使い方
調査時期	駅構内：1月 大学生：1月	対象空間
対象者	駅構内利用者 大学生	
調査方法	駅構内利用者：ヒアリング調査 大学生：アンケート調査	
データ数	駅構内：100人(70.9%) 大学生：41人(29.1%)	
調査項目	1.交流空間の使い方 2.交流空間の重要度・十分度評価 3.交流によって得られる心理的影響の評価 4.求められる交流空間のかたち 5.属性	交流空間の使い方
	男女比 男：68% 女：32% 年代 非高齢者(60歳未満) 105人(74.5%) 高齢者(60歳以上) 36人(25.5%)	

3. さまざま交流に対する人々の意識

交流の現状と交流に対するニーズは、その人その人によって異なるものと思われる。他者との交流が少なくても交流ニーズの少ない人や、これとは逆に、

交流が多くても、さらに交流を求める人なども考えられる。アンケート調査において、会話による交流の必要性和現状における交流活発性を分析したところ、調査対象者はおもに次の3つのグループに分類された。

Aグループ：交流が活発で、交流ニーズも高い人(52名)

Bグループ：交流は不活発で、交流ニーズの高い人(44名)

Cグループ：交流が不活発で、交流ニーズも低い人(41名)

以下では、交流空間に対する認識特性や空間ニーズについて、とくに交流ニーズがありながら、交流が不活発なBグループに着目して、今後の交流空間について考察する。

4. さまざまな交流とそのための空間の適性

(1) さまざまな交流に対する認識

図-1には、さまざまな交流に対する認識として「まちの中で何気ない会話をする」と「人と同じ空間にいて満足感を得ること」の重要度を示している。A、Bグループにおいて「会話による満足感」、「人と同じ空間にいて満足度」が高くなっている。その一方で「まちで一人で集中すること」についてはBグループが最も高くなっており、空間の持つ意味や、使い方が多様であることがうかがえる。

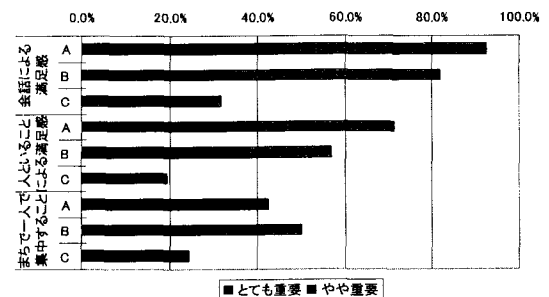


図-1 交流に対する認識

(2) 交流の重要度と充足度

さまざまな交流行為の重要性和そのための空間の充足性について図-2に示している。交流が不必要

で不活発なCグループ以外は重要度と充足度に大きな差があり、交流の必要性は感じているが、その場が足りていない状況であると考えられる。

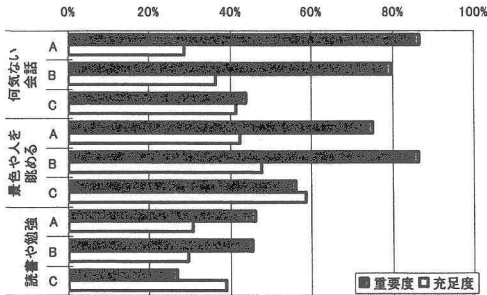


図-2 交流の重要度評価と空間の充足度評価

(3)さまざまな交流に適した空間の認識

まちでの「何気ない会話」や「特定のものをみること」、「景色などを見ること」など、種々の空間の使い方について、「適している」、「やや適している」、「あまり適していない」、「適していない」にそれぞれ+2点から-2点を配点し、各グループごとにその適性に対する認識を図-3に示した。図-4はその空間のイメージである。

「何気ない会話」に適している空間としては、Aグループで、「ベンチのある歩道」や「イベントのできる広い空間」、「多様な用途に利用できる空間」のすべてで適している、としているのに対し、Bグループでは「多様な用途に利用できる空間」のみ高い値となっている。このほかこの空間に対する評価としては、同じくBグループの「景色などを見る」や、Cグループの「勉強や読書」などにおいて比較的高い値となっている。

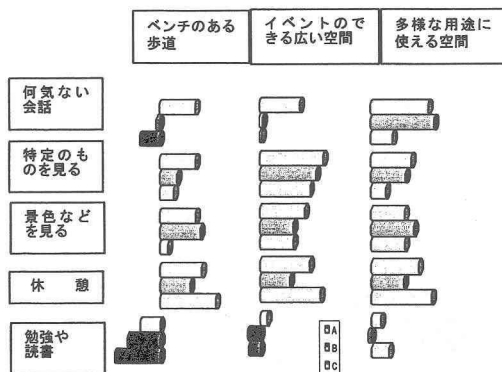


図-3 さまざまな交流にふさわしい空間



図-4 交流空間

5. 交流空間としての要素の重要度

図-5には「多様な用途に利用できる空間」をふくめ、交流空間としての要素について示している。Cグループに比べ、A、Bグループではとくに「イベントなどの情報」、「情報の定期的更新」、「気軽にいれる」、「買い物施設の中にある」、「いろいろ見て回れる」、「一人になれる」、「一人で集中できる」が重要だと感じていることがわかる。

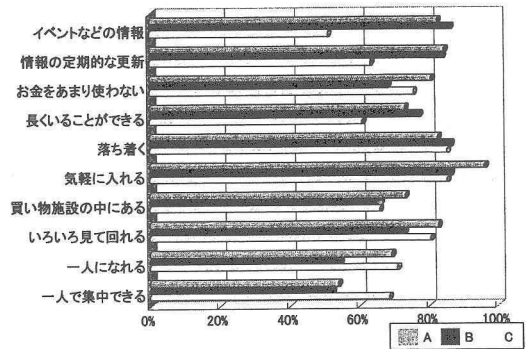


図-5 交流空間としての要素の重要度評価

6. まとめ

分析結果より交流に必要性を感じながら実際に交流を活発に行っている人とそうでない人の間には空間に対する利用適性に差があり、交流が不活発な人は交流できる空間の範囲が狭い。しかし本研究で調査対象とした公共の多目的空間は交流の活発・不活発による利用適正の差が少なく、交流が不活発な人にとっても交流しやすい空間であり、今後このような施設の整備が重要になると考えられる。

《参考文献》

- 1) 国谷誠朗：孤独よ、さようなら 母親離れの心理学（集英社文庫 2000年）